産科的立場から見た母子相互作用

雨　森　良　彦（日赤医療センター）

われわれは三つのアプローチによって母児相互作用について研究調査を行った。すなわち，1)最近の出産形式では麻酔下で意識のないまま妊婦が分娩し，吾が子と感激の対面が期待できないことが多いが，これに対しては心理的に大きな後遺症を残こすのではないかという杞憂がある。したがって母，父（夫）が共に意識を失わない無麻酔下の自然分娩で出産の感激を経験し，母児同室制をスタートする分娩様式（いわゆるラマーズ法）について検討を加えて従来の麻酔下分娩に比して医学的欠点があるかどうか調査した。結果としてはなんら不都合は認められず，夫の立合いによって感染症が増加することもなく，出産後の母乳授乳の確立にも好影響を与えていることが判明した。次に2)やや年長児となるが母親から隔離されて入院した子どもが，入院中どのような反応を起こし，入院による影響が退院後どのような行動として現われるかという課題についてアンケート調査及びビデオ方式によって研究した。子どもの年令，発達段階，入院前の母子関係，入院期間などによっても異るが，母子分離入院はその後の児の情緒発育に大きな断層的影響が与えられることが判明した。出産前後のみならず小児の全成育期間を通じて，母子関係の重要性が認識されるものである。今日の完全看護と称する小児科病院の心理的ケアーを欠いた看護には反省の資料として呈せられるものである。第3)のテーマとして直接母児相互作用とは関連がつけにくいが，児が母親から身体的独立または非独立しているバロメーターとして直立法行への諸能力の発育発達を客観的に評価する基礎的研究を行った。人類が他の高等哺乳動物と異なり生後約1年独立しえないのは何故であろうか。姿勢制禦に関するこのデーターは一児母児相互には千遠なものであるが，将来的には何んらかの関連性が論じられることもあろう。基礎的客観的資料として本研究班に蓄積したい。